国立大学法人 大阪教育大学

教員養成課程美術・書道教育部門（美術）　加藤可奈衛
学部授業「コミュニティとアート」受講学生

地域にとび出せ！
～学部授業「コミュニティとアート」の活動実践～

美術教育コース専門科目「コミュニティとアート」は、2017年度から3回生対象に開講している。新しい指導要領では、「教育活動の実施に必要な人的又は物的な体制 を家庭や地域の人々の協力を得ながら整える」「高齢者や異年齢 の子供など、地域における世代を超えた交流の機会を設けること」などの文言が明記され、学校と地域社会、世代を超えた地域市民との協働・交流などを積極的に推奨している。
「コミュニティとアート」の時間では、アートを通じ地域コミュニティの現状やワークショップの可能性などについて概観し、実際に地域へとび出して、自ら検証し相対化する場を提供する。講義の目標は以下のようである。

①アートの視点をもって、地域コミュニティの現状やワークショップ等の可能性などについて理解する。
②地域社会におけるアート活動の有効性、アートによる地域力アップへの可能性を理解する。
③ワークショップ、展示等の企画実施を主体的に行い、それを自ら検証し相対化して捉える視点を獲得する。

地域の様々な場所・人・ことと関わりながら、地域コミュニティでのワークショップや展示等を学生主体に企画立案実施する。それにより、学生自身が自らの課題を見つけ、問題解決しフィードバックしていく力を獲得してくれることを期待している。
1年目は市内の地域商店会の交流スペース「ふれあい館オガタ」でのワークショップの実施、2年目は、新たにリノベーションされた古民家レストラン＆多目的スペースにて作品展示、3年目は、リビエールホールでの「よしもと芸術文化祭」・「をかしわらマルシェ」＆「大正通りRe:スタート 」などのイベントに参加することを中心に実施した。4年目は、地域店舗のシャッターを飾る「シャッターアート」の取り組みを中心に実施した。
1～3年目までは、JR柏原駅周辺エリアでの活動であったが、今年度は河内国分エリアでの活動展開を通じ、地域コミュニティとの新たなつながりや可能性を模索できた。さらに、授業での活動実践をきっかけに「受講学生有志による自主的な活動」へと発展し派生した活動にもつながった。それらの活動は大学のHPトピックスにも取り上げられた。今回は2019~の活動について報告する。

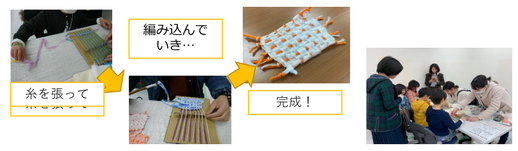
2019年度の活動　企画1「オリジナルクレヨンをつくろう」（チーム：だいきょう図工室），　企画2　「手ぬぐいコースターをつくろう」（チーム：手ぬぐいユニバーシティ）

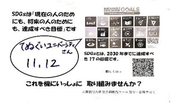
<企画概要>
・実施日時：2019年11月16日㈯17日㈰　11：00～15：00
・実施会場：リビエールホール2階「よしもと芸術文化祭」特設会場
・企画名　：「オリジナルクレヨンをつくろう」
　～クレヨンという身近な画材の可能性を再発見しよう～
・実施内容：事前に学生が用意した削ったクレヨンを溶かし再凝固したクレヨンを子どもたちにつくってもらう。2日間で120名以上の子どもが体験した。
○来た人にどんなことを感じてもらうか
　身近なクレヨンという素材について性質の理解を深めてもらう。また素材について理解、再発見してもらう。図工室を通してクレヨンという素材だからこそできた色や形の面白さや美しさを感じて、子供たちに楽しくクレヨンという素材に触れあってもらう。
○目的を達成するために
　クレヨンという画材を用いてクレヨンという身近な素材における表現の可能性について再発見できるように言葉をかけていく。参加者が自由で伸び伸びとした活動ができるように配慮する。
○手順
　粉状のクレヨンを溶かして再凝固化する（クレヨンの性質の再発見）➡再凝固化したクレヨンを使って楽しく絵を描いてもらう（素材との触れあい）
○学生の気づき、感想
　企画を通して多くの子どもたちと話すことができた。
　高学年になるほどクレヨンに触れる機会は減るようだ。クレヨンという素材について再発見してくれたようでうれしい。
　・子供たちの「すごーい！」という声が聞こえてきた。気付きや発見を促せたのではないかと思う。
　等
参加した子どもたちの気づき、感想
・好きな色をたくさん入れた。きれいだった。家で使ってみたいし、作ってみたい。（小6）
・初めてだったけど楽しかった。（小1）
・いろいろな色のクレヨンを混ぜたら、いろんな色のクレヨンができて楽しかった！（小4）等

<企画概要>
・実施日時：2020年 2月 9日㈰　8：30～15：00
・実施会場：① をかしわらマルシェ　② 大正通り Re:スタート
・団体名　：手ぬぐいユニバーシティ
・企画名　：①「学生が作った手ぬぐいの展示」②「手ぬぐいコースターをつくろう」
・実施内容：①学生がデザインした手ぬぐい展示と手ぬぐいアレンジ活用方法の展示
　②手ぬぐいアレンジワークショップ

受講学生の気づき、感想
①「学生が作った手ぬぐいの展示」
・柏原市民の方との「手ぬぐいが名産ってご存じなんですね」、「だからこういうワークショップなのね」などの会話を通して、地域の人々とつながりを持てたと感じた。
②「手ぬぐいコースターをつくろう」
・手ぬぐいの展示ではキャプションをつけたことで、立ち止まって読む人も多かった。
・展示方法をもっと工夫したかった。手ぬぐい１つ１つに額をつける などの工夫が事前にできたと思う。

参加した方々からの気づき、感想、コメント
①「学生が作った手ぬぐいの展示」
・シルクスクリーンで手ぬぐいに染めたことに驚いた。
②「手ぬぐいコースターをつくろう」
・孫に教える、家でもやってみたい。
・これは大変勉強になった。





2020年度の活動　企画1「店舗シャッターアートの制作」（チーム：コミュニティとアート・チームKATO），　企画2　「空き店舗での展示・装飾活動」（チーム：大教 Art Eggs），　その他派生活動

今年度は、国分エリアでの活動となり、地域事業者の新店舗のシャッターアート制作の機会を得て新たな展開ができた。関連活動として、空き店舗活用した展示、街の景観にも関わる装飾活動、受講学生による高校生への指導実践、さらに派生した事項として、学生有志グループ「コクバンズ」によるチョークアートの展示などの活動ができた。これらの活動は、大学HPトピックスでも紹介された。

美術を専攻する学生らが柏原市内に新たに開店する店舗のシャッターアートを制作

（2020年11月20日　大学HPトピックス記事より）

美術・書道教育部門の加藤可奈衛教授が担当する授業「コミュニティとアート」の受講生11人が，柏原市内に新たに開店する店舗のシャッターアートを制作しました。

この取組は，学生が大学で学んだことを活かしながら，地域の人と触れ合う社会体験を行うことや，景観まちづくりというソフト面での地域貢献を目的に行われたものです。

過去に同様の取組として，本学教員3名を中心とするプロジェクトが，「まちづくりと美術を融合させた学生参加型の地域実践活動－まちの彩り・景観まちづくりプロジェクト」と題して，平成20年から平成26年まで，柏原市オガタ通り商店街の十数軒の店舗にシャッターアートを描いています。

今回のプロジェクトは，10月9日に現地で制作内容について説明を受け，18日にデザイン案が確定，19日にシャッターにペイントを始めて，11月1日の開店前日に完成しました。

受講生は，制作期間が限られていたことから，土日も作業を続けました。挿画班が現場で，発色の試し塗りをしている間に，デザイン班が，大学で，文字をくりぬいた型紙を作り，そのあと，挿画班が，スプレーでステンシル（型染）をするなど，声をかけあいながらリレー形式で作業を展開しました。

制作に参加した学生は，「日曜の最後の作業を終え，シャッター全体を見たとき，今までの疲れが吹っ飛ぶような感動を覚えました」「今年の2月頃から新型コロナウイルスが流行り，特に人と直接会って交流する機会があまりありませんでした。だからこそ学部の仲間たちと協力して1つの作品をつくるということが貴重で，より価値があることに感じました」と語りました。

また，「作業中，地域の人たちが声をかけてくださり，コミュニティとアートの本質を知った気がします。少しでも地域活性化につながれば良いと思います」「他人の物に他人のお金で絵を描かせていただくことになるため，自分で何かをつくるとき以上に責任を持って活動しました」と話しました。

加藤教授は「今回は学生たちに，たいへん良い実践経験の場を提供できました。ほっこりしたデザインで，地域の方々にも好評のようです。学生たちは，お互い協力して各自の持ち味を活かし，上手に役割分担し制作してくれました。キャンパスから飛び出しての活動，地域の方々との交流を通じ，いろいろなことを考えてくれたことでしょう」と締めくくりました。

完成記念写真

制作の様子

美術を専攻する学生らが空き店舗に作品やクリスマス装飾を展示

（2021年 2月 1日　大学HPトピックス記事より）

学校教育教員養成課程美術・書道教育コース学生らが，柏原市河内国分駅前の空き店舗に，学生の作品や，ステンドグラス風切り絵などのクリスマス装飾を展示しました。

この取組は，美術教育部門の加藤可奈衛教授が担当する「コミュニティとアート」という授業の一環で，受講生たちがシャッターアートを制作したことをきっかけに，大阪府の「商店街等エリア魅力向上モデル事業」のうちのひとつ「国分DEマルシェ」実行委員会から声がかかったことから始まったものです。同授業の受講生のうちの有志が，グループ「大教 Art Eggs」を結成し，取り組みました。これは，町の活気を復活させようという取組に加わり，学生たちが大学で学んだ美術の技能を活かして，地域活性化の一端を担うこともねらいとしています。

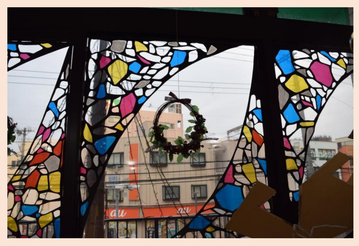
今回の活動で学生たちは，昨年12月5日から店舗内の清掃，折り紙やリースによる飾りつけを始め，18日からテラスにて高さ4mのツリー型イルミネーションを点灯し，21日から店舗を訪れた人に対して作品の展示の紹介を行いました。学生たちは，店舗を訪れた人から声をかけられながら，授業の合間や休日を利用して準備を進めました。

「国分DEマルシェ」実行委員会の岡崎宣子さんは「新型コロナウイルスの影響で元気のないまちに，『希望の光』をいっしょに点灯してくださってありがとうございました。今年もたくさんコラボして，いっしょに，まちを元気にしていきましょう」と述べました。

「大教 Art Eggs」メンバーの学校教育教員養成課程美術・書道教育コース3回生の岩本奈々さんは「仲間と時間をかけてツリーやステンドガラス風切り絵を制作し，空き店舗に飾ったとき，タントタント（店舗）の方や地域の方からすごく綺麗だねと声をいただいて，とても嬉しかったです」と話しました。同メンバーの同コース3年生の太田有紀さんは「多くの時間を要しましたが，ツリー，ステンドグラスの切り絵など窓一面に飾らせていただき，貴重な機会となりました。とても楽しかったです」と語りました。

加藤教授は「学生が，主体的に活動してくれて大変頼もしく思っています。実際に地域の中での活動では，たくさんの方にお世話になったり，予定通りにいかないこともたくさんあります。その一つ一つが貴重な経験となることでしょう」と締めくくりました。

空き店舗会場風景


空き店舗装飾の様子

受講学生による壁新聞「コミュニティとアート新聞」作成の試み

授業活動の振り返りの一つとして、壁新聞の作成を検討した。自分たちが活動した内容をふりかえり相対化して捉える視点につなげたい。今回は、コロナ禍の状況により授業時間にも制約されたが、今後の継続展開を検討していきたい。

コミュニティとアート新聞
太田有紀/平松望/藤本七光

コミュニティーとアートとは
「コミュニティーとアート」の授業は、その地域について学ぶことから始まった。柏原では、河内木綿のワークショップや、『手ぬぐいウィーク』『をかしわらマルシェ』など、地域での活動が積極的に行われている。ここでは、何かをきっかけとして人が集まることで、新たな提案が生まれ、また人が集まるといったように、交流が繋がっていた。アーティストもまた、コミュニティーから自らのアートへと繋げることができるのではないだろうか。受講を通して、美術科の学生である私達にとってのアートとは、コミュニティーがアートに求めるものとは何かを考えるきっかけとなったように思う。
何ができる‥？
地域 × アート

シャッターアートの取り組みについて
2020年10月9より、柏原市内に新たに開店する店舗のシャッターアートを制作することになった。求められたデザインをどのように表現するか、凹凸のあるキャンバスに文字を書くにはどうすればいいか、限られた制作期間の中で協力し、アイデアを出し合った。自分の作りたいものを自分の為に作ることの多かった私たちにとって、大学内だけでは得られない経験・学びを得ることになった。

地域との関わり
制作を通して、シャッターアートが完成するまでの様子をテレビ局の方に取材しに来て頂いたり、通りすがりの方が声をかけて下さったり、地域との直接的な関わりを体感できた。また、新たな取り組みとして、お弁当屋さん「タントタント」の2階部分を借り、2020年12月に作品展示会を行った。私達の作品は、シャッターアートという形で街に残り続ける。大学での授業をきっかけとして、繋がった柏原との縁を今後も大事にしていきたい。

受講生の声
現地でのシャッター制作時間や日程が限られている中、仲間と協力してシャッター完成にたどり着いた瞬間はとても感動したし、その場面に立ち会えてよかったと思う。
今回の活動で、シャッターに文字や絵を描く技術の面や、仲間との連携やコミュニケーションの面でも、困難なことがあった。しかし、日曜最後の作業である文字のステンシルを剥がし、シャッター全体をみたとき、今までの疲れが吹っ飛ぶような感動を覚えた。個々の制作や作品ではないので、通常の授業より責任重大だったが、地域の方との交流を通して様々な発見があり、楽しい記憶が今でも残っている。
自分以上にがんばる仲間がいて、サポートしてくれる先生や地域の方がいてくれたから、一緒に制作し、完成した作品だと思う。
この授業を受講してよかったと思った。そして授業を通して、私のまわりにいて支えてくれている、見てくれている人に感謝を伝えたい。

豆知識コーナー
柏原について
大阪教育大学は、大阪の柏原市に位置している。現在奈良～大阪間を流れる大和川は、元々柏原市に隣接する八尾市を通っていたが、川の氾濫等を理由に18 世紀に付け替えられることとなった。それまでの川床は畑として生まれ変わり、現在にまで受け継がれる美しい手織り木綿、“河内木綿”が栽培されるようになった。

第1号　コミュニティーとアート

<派生活動> 高校生のシャッターアート活動指導

受講学生２名が、大阪市立西高校からの依頼を受け、3 日間に渡り3 年生 80 名の「シャッターに絵を描く活動」の指導サポートに関わった。本授業での学んだ経験を紹介しアドバイスなどを行い、高校生の実際の活動を体験する貴重な経験となった。初めに、スライドレクチャー「シャッタアート制作に向けて」を行い、１、自己紹介・ ２、シャッターアートとは ・３、経験談＋作業の流れ ・４、イメージ画をシャッターに写し取る方法 ・５、シャッターアートを通して得た学びなどの説明を実施し、現場での制作をサポートした。

実施後の反省として、「内容を十分に伝えるプレゼンテーションの難しさを痛感した」、「シャッターアートは描く環境に大きく影響されることが分かった。」などを挙げ、「何をしているの？」 と地域の人に声を掛けられ、コミュニケーションが生まれたことなどを報告している。この活動を通じ学生は、自分自身に改めて向き合い、様々な気づきや経験を獲得したと記録している。

レクチャーの様子

下絵作成サポート

現場活動サポート・取材

<派生活動> 美術を専攻する学生らの黒板アートが市の広報誌「広報かしわら」の表紙に

（2021年 2月9日　大学HPトピックス記事より）

学校教育教員養成課程美術・書道教育コースの学生らの黒板アートが，人口7万人の柏原市全域に配布される市の広報誌「広報かしわら」の表紙を飾りました。

これは，同コースの授業「コミュニティとアート」で，受講生たちがシャッターアートを制作した縁で，大阪府の「商店街等エリア魅力向上モデル事業」のうちのひとつ「国分DEマルシェ」実行委員会から声がかかったことから始まりました。同授業受講生のうちの有志が結成した「大教Art Eggs」が，河内国分の空き店舗に作品展示や装飾をし，「コクバンズ」が同店舗で「まちなかチョークアート展」（＊）を開催したところ，SNSを通じてその活動を知った柏原市の広報担当職員から，依頼があったものです。コクバンズは，同授業受講生のうちの有志3回生6人と，興味を持った1回生5人で構成されています。

これらの取組は，学生たちが，地域を盛り上げたい団体に協力することで，地域の中で自分自身の作品発表の場を持つことができ，技能の向上と社会貢献の目線を持つことをねらいとしています。

今回の活動は，河内国分の空き店舗の展示が終わった昨年12月末に依頼があり，今年の1月7日の締切りに向けて，A3程度の木の板に黒板塗料をぬり，デザイン画を作り，オイルパステルで制作しました。

コクバンズ代表の同コース3回生の宇田昂史（うだ・たかし）さんは「1回生の2人が協力して，かわいい作品をつくってくれました。コクバンズとして活動ができてよかったです」と述べました。

メンバーの同コース1回生の樋口紗英さんは「今回描いた表紙で，誰かがちょっとほっこりできるような気持ちになってくれれば嬉しいと思います」と語り，同コース１回生の畑中穂香さんは「柏原市の広報の表紙を担当するという素敵な機会をいただきました。かわいく描けたのではないかと自分でも気に入っています」と話しました。

柏原市秘書広報課の北西参事は，「コロナ禍の中，少しでも市民の皆さんに明るい気持ちになって癒されてほしいという思いから，コクバンズさんに依頼させていただきました。広報誌を配送した際に，市民の方から『可愛い！癒される』など喜びの声を聞く事ができ，大変嬉しく思っています」と語りました。

広報かしわら2月号表紙（上）と市の広報担当職員から完成誌を受けとるコクバンズメンバー（下）

（＊）「をかしわら×コクバンズ
まちなかチョークアート展」
開催（12月13日～25日）
学生で構成するグループ「コクバンズ」が制作したチョークアートが、柏原市内の店舗で展示。

<ふりかえり>
「とにかく外に出てみる！」ということをモットーに学外実践を行うことができた。オンラインも活用して地域実践家によるレクチャー、大学院生による地域でのアート実践報告なども交え学生たちには大いに刺激的な時間となった。「コミュニティって？」「アートって？」などの問から、地域イベントに参加することを目標に、「コミュニティとアート」を考えた。大学に来ていてもその地域にほとんどかかわりがない学生が、「アート」の視点をもって地域コミュニティを体験し、そこから派生展開する可能性について模索した。様々な人との関係の中で、学生自身が自らの課題を見つけ問題解決し、フィードバックしていく様子がみられた。これからの学校教育での地域の特性を活かした実践活動を考える一つの経験として、本講義での経験が役立ってほしい。
今年度は、初めて国分エリアでの活動が展開できたことで、街をフィールドにした授業活動の可能性がさらに広がった。また、コロナ禍において、屋外活動や、オンラインを活用し密を避ける方法の可能性、オンラインで地域現場とつないで、その活動を他の授業で紹介するなどの試みもできた。大学や市の広報の方々のご協力により、いくつかの発信ができたことは大変ありがたく、感謝したい。次年度に向け、継続的なコミュニケーションを図っていきたいと考えている。